

研究調査報告

# 「大濱用一文書」に見る八重山神社建設計画と未鎮座の背景 ——「近代沖縄における祭祀再編と神社」視点序章——

前田 孝和

(非文字資料研究センター 客員研究員)

## I 石垣市立図書館で八重山神社新情報入手

「近代沖縄における祭祀再編と神社」研究班の石垣島の祭祀空間や戦争遺構などの調査（管内神社「八重山神社」、御嶽や権現堂など・平成 31 年 3 月 13 日から 16 日）は、班リーダーの後田多敦氏が本号に報告した通りであるが、15 日夕刻、石垣市立図書館で戦前の地元紙『海南時報』や関係資料を複写したおり、図書館職員の方から「八重山神社地鎮祭々文原稿」が沖縄県公文書館に所蔵されているとの情報を得た（『大濱用一文書』（閲覧用資料コード 0000011673）、『沖縄県公文書館だより ARCHIVES アーカイブズ 第 56 号』『沖縄県公文書館所蔵資料展 むかし沖縄 戦前の資料あれこれ』平成 31 年 2 月 14 日発行）。そこには八重山神社地鎮祭祭文の写真（部分）と説明文として「1940 年（昭和 15）8 月、紀元 2600 年記念八重山神社建立奉賛会が結成された。奉賛会は現石垣市大川の石垣御嶽を敷地に選定し、翌年には建設寄付募集を大々的に開始した。」と記されており、このような資料があったことに驚きと喜びを感じた。これまで二回にわたる八重山神社建設計画が立案されつつも中断したのはなぜだったのか、新しい展開が見出せるのではないかと期待があったが、いずれにしても『大濱用一文書』の全容を知ることからはじめなければならぬため、後日、『大濱用一文書』中の「八重山神社及護国神社関係資料」を入手した。

これらの資料を中心に、社名は同一ながら、昭和 20 年 5 月、於茂登岳（沖縄県最高峰、標高 525.5 m）の中腹（高度約 370 m）に独立混成第 45 旅団が建設した管内神社「八重山神社」（小祠）とは別の「八重山神社」の二回にわたる建設の動きについて概略を述べる（最終的には未鎮座）。なお大濱用一は、「八重山神社」建設に関わった八重山郡振興期成会長で八重山神社建設奉賛会長大濱用要の孫という。

## II 「八重山神社及護国神社関係資料」の全容

石垣市立図書館で紹介された『大濱用一文書』の全容は、沖縄県公文書館データベースの「目録詳細」で確認でき、その内の「八重山神社及護国神社関係資料」の「目録詳細」は次の通りである。<sup>註1</sup>

・神社建設奉賛会評議員会協議題・八重山神社建設奉賛会則・南風原英意氏より大濱用要氏宛の郵便はがき・八重山神社建設奉賛会長大濱用要氏より八重山神社建設奉賛会宛の辞任届・八重山神社地鎮祭々文原稿・八重山神社地鎮祭々文本稿・八重山神社建設委員氏名・紀元二千六百年記念八重山神社建設趣意書・紀元二千六百年記念護国神社御造営奉賛会創立趣意書・紀元二千六百年記念護国神社御造営奉賛会則・八重山神社建設の際の所有地提供に関する地主協議会通知の回章・八重山神社建設関係資料<sup>筆者加筆</sup>（8 点）

そして「八重山神社建設関係資料」8 点は次の通りである（文書名は筆者が仮付与）。<sup>註2</sup>

・評議員会に関するメモ 3 点・昭和 16 年 5 月 6 日評議員会での会長挨拶草稿・八重山神社建設奉賛会則（ガリ版刷）・八重山神社明細書・宮古神社及び瀬水神社祭神表・不明文書

前記の通り、護国神社に関する資料 2 点が含まれている。

## III 八重山神社建設

### 「奉賛会趣旨・目的」と「祭文」の内容

八重山神社建設については昭和 10 年 8 月の時点で話題となっており、昭和 14 年中に数回にわたり神社建設の打ち合わせがおこなわれ、昭和 15 年 8 月 1 日の石垣町常会で八重山神社建設奉賛会設立、奉賛会会則、奉賛会事務所を石垣町役場に置くことがそれぞれ正式決定



され、その後の奉賛会評議員会で会則修正、各種委員の決定、鎮座地の決定（大石垣御嶽及び記念運動場一帯）を見た（『海南時報』昭和15年5月2日、8月11日、9月14日）。神社建設趣旨を、<sup>註3</sup>「紀元二千六百年記念八重山神社建設趣意書」から見てみよう。神社建設は石垣町町制10周年及び紀元2600年記念事業である。

（前略）周知の如く由來本郡民は各地各所に散点する拝所御嶽等の郷土的祭神を中心とする信仰によりて報恩感謝の誠を效せしも未だ國家的祭神を中心とし皇室國家國民の繁榮と平和と幸福を祈念する祭事の機會に恵まれぬうらみあり 従前の美俗は素より大事なるも一面に於て群民總てが均しく仰ぎ奉る國家的神靈を祀りこれを通じ皇國民たるの精神生活を統一練磨擴充し以て神國日本の壯嚴無比なる本姿に歸依するは喫緊の要事なり 此秋にあたり我が郷土八重山に於て多年の懸案たりし八重山神社創設の議可決せられ皇紀二千六百年記念事業として一路これが實現に力強き歩みを始め大石垣御嶽後方一帯大凡一萬坪の地を相して八重山神社を建設し伊弉冊尊事解男尊速玉男尊の御靈を鎮め奉らむとす 希くは各位の喜捨によりこの意義深き事業の達成に御協賛賜らむことを（後略）

総予算額は50,000円、収入内訳は郡内4ヶ町村負担金10,000円、一般寄附金40,000円、支出内訳は社殿造営費25,000円、境内参道整備費9,900円、基本金積立金5,000円、祭器具調度費700円、設計監督費1,500円、敷地買収費5,000円、雑費2,900円というものだった。

「八重山神社建設奉賛會則」<sup>註4</sup>による建設目的（第2条）及び事業内容（第3条）は、次の通りである。

第二條 本會ハ八重山島權現堂 神社明細帳編入ノ達成ヲ計ルト共ニ神社ヲ建設スルヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事項ヲ處理シ事業ヲ遂行スルモノトス

- 一 神社明細帳脱漏編入願ニ添付スベキ各事項ノ調査整備ヲナスコト
- 一 神社ノ敷地選定 神社設計建設等ヲナシテ神威ノ昂揚ヲ計ルコト
- 一 神社維持經營案ヲ確立スルト共ニ基金ヲ造成スルコト
- 一 寄附金募集ニ關スルコト

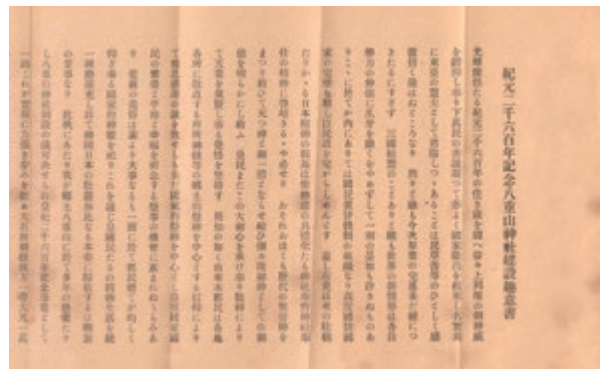


写真1 「紀元二千六百年記念八重山神社建設趣意書」の前半部分「沖縄県公文書館」所蔵

- 一 釀出金並ニ寄附金ノ收受整理ニ關スルコト
- 一 合祀スベキ祭神ニ關スルコト

そして紀元2600年記念式典当日の11月10日早朝8時から地鎮祭を斎行、八重山神社奉賛会長大濱用要が以下の祭文<sup>註5</sup>を奏上した。

#### 八重山神社地鎮祭々文

掛巻もあやにかしこき天照大神並八重山權現堂の  
御靈主の大前に<sup>みたましろ</sup>拝み奉らむと此の齋ひの床に<sup>いは</sup>嚴の<sup>いかし</sup>  
荒薦を<sup>あらこも</sup>嚴の<sup>いかし</sup>席と敷き設けて八重山神社建設奉賛会長  
大濱用要常より忌まわり清よまわりて八重山神社地  
鎮の幣帛<sup>まを</sup>捧げまつらくと惶み惶み日さく

由來八重山郡民は常に御神たちの大稜威をいなぎに  
捧げ持ち<sup>おほみたま</sup>大恩頼を<sup>そびら</sup>背に<sup>かんながら</sup>負ひ持ちて<sup>かな</sup>惟神なる大道を  
唯一筋に朝な夕な<sup>おろが</sup>拝み仕へ奉りしも今迄の本堂にて  
は大前の事ども漏れ落ちむことあらむをば最もいた  
く懼れ恐み奉り一つは皇紀二千六百年の佳き歳を永  
久に記念すべき赤誠を現はさむと今度この岡のほと  
りの清浄なる土地を<sup>や</sup>相して<sup>ほに</sup>八百土築き固め<sup>まきはしら</sup>眞木柱し  
めて齋ひ奉り新神殿を<sup>みあらか</sup>厳しく麗はしく<sup>みなとえ</sup>築き造り仕へ  
奉らむと計畫なりぬ實に日頃の思ひ<sup>くはだて</sup>港江に<sup>け</sup>さす潮の  
満ち足らへる心地す因りて<sup>や</sup>八十日<sup>そか</sup>日はあれど今日を  
生日の足日の吉辰の美しときと<sup>いくひ</sup>撰び<sup>たるひ</sup>定めて<sup>よきとき</sup>諸々の<sup>うま</sup>  
御供仕へ奉り天津祝詞の太祝詞もちては<sup>ふとのり</sup>はひきよめ  
やがて遷し奉らむ御神<sup>みあらか</sup>殿の地鎮の祭典を取り行ふこ  
と、はなるぬ

これをもちて<sup>みやしろ</sup>禮代の御酒御饌に更に<sup>かぐのこのみ</sup>供ふる初穂果物  
にいたるまで<sup>うみかはやまの</sup>海川山野の味物を<sup>ためつもの</sup>高くなし置き捧げま  
つりてひろく厚く祭文を奏し奉るによりて群民一全  
の赤き直き眞心をあな面白と<sup>みそなほ</sup>楽しく照覧し<sup>あきら</sup>聞し召し  
て今より着手する神社御造營工事に関して露禍事あ  
らしめず駿馬の天馳りゆくごとく些も滞ることなく

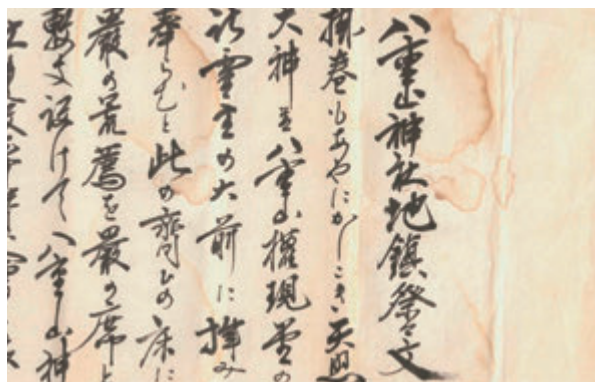


写真2 「八重山神社地鎮祭々文本稿」の前半部分〔沖縄県公文書館所蔵〕

一切の奉仕作業を終へしめたまひ民草をして<sup>いやはし</sup>彌益々大稜威に浴せしめられ榮えゆく大御代を壽ぎ稱えしめ給へと惶み惶み日す（筆者註・フリガナは「八重山神社地鎮祭々文原稿」にあったものを筆者が付与）

#### IV 「八重山神社」建設中断の理由

昭和15年11月10日に地鎮祭を斎行して、その後徐々に寄附金も集まり、昭和16年3月26日付で沖縄県の寄附募集許可が正式認可され、これからいよいよ本格的な募金がおこなわれ神社建設完遂に向けて洋々たる動きになるものと思われた矢先、重大な問題が表面化（学校設置）した。結果的には学校設置が優先され、第一次八重山神社建設は中断することになった。5月6日開催の評議員会で「種々重要協議」（『海南時報』昭和16年5月5日）をおこない、奉賛会長大濱用要は、評議員会の席上で、学校設置と神社建設は別問題であり、神社と学校の両方に寄附することは厳しいという考えに対し神社建設は既に決定されたもので延期することは考えられないとし、また地鎮祭まで斎行し、募金もはじまり、各町村は昭和16年度予算で建設関係費を見込んでおり、そして時局厳しい時期であるからこそ計画通りの早急な神社建設の意義を「昭和16年5月6日評議員会での会長挨拶草稿<sup>註6</sup>」に則り、

御承知ノ如ク伝来ノ小学校ガ国民学校ト改称サレタソシテ教育ノ内容ニモ根本的刷新ヲ加ヘラレタソノ本音ハ皇国主義ヲ基調トシタ教育テナケレハナラナイ故ニ教科書ニモラレタ教材ニモ之ヲ統合シテ皇国ノ道ヲ修練スル目的ニ帰一セシメテ国民精神ノ昂揚ニ努メシムルト云フ事ニナツテ居ル則チ従来ノ教育ガ稍モスレハ□□又明ニ心粋シテノ個人主義自由主義教育トナリ或ハ偏知的教育ト云フヤウナ契リ様□

精神的方面ニ重点ヲ置ク事ニナツタ事カウ考ヘテモ神社設立ガ如何ニ郡民ニ課セラレタル最高ノ問題テアリ最大□□努テアルカラ伺ツテ居ルノテアル

という趣旨で語り、更に

私ハ神社問題ト中等学校問題ハ共ニ乗り出シタ船テアル以上互ニ衝突セス彼岸に安着スルヨウ努力シテ必ス本事業ヲ完遂シテ御目ニカケル事ヲ茲ニ明言スル諸君御安心ノ上杞憂セス御協力アラン事ヲ切望ス<sup>註7</sup>ル

と訴えたようであるが、神社建設続行の決議には至らなかった。大濱用要はその責任を痛感し会長辞任の意志を固め、昭和16年5月9日付の押印された奉賛会長「辞任届」が『大濱用一文書』に収められている。実際、辞任届が提出受理されたかは不明だが、昭和18年の県主導の第二次創立計画「県社八重山神社」では奉賛会長が八重山支庁長に替わっている。

なお学校設置問題は新聞で幾度となく報道されており（『石垣市史 資料編近代7』平成3年8月31日）、昭和17年4月には八重山中学校と高等女学校が開校し、高等教育を受けるために沖縄本島まで出向する必要性がなくなり、父兄の経済的及び生徒の精神的な負担が大いに軽減されたのはいうまでもない。学校設置関係記事の中に神社関連を見出すことはできていないが、今一度、詳細な調査が必要であろう。

#### V 第二次創立計画「県社八重山神社」と営内神社「八重山神社」との関係

第一次「八重山神社」建設計画は昭和14年に具体化し、町村の支援を受けて地鎮祭も斎行したものの昭和16年5月には中断、次いで昭和18年に県主導で第二次の県社「八重山神社」創立計画が動き出す。沖縄県知事は昭和18年10月2日に内務大臣宛てに「神社創立案ニ関係<sup>註8</sup>スル件」を提出、その神社創立理由は、

本県ニアリテハ正規ノ神社少シト雖モ我国神社ノ原始的形態ヲ伝承スル御嶽ハ村々ニ存在シ然モ神籬形式ノ神社様式ニ則リテ姫祭ノモトニ幽祭ヲ営ミ来リ一面ヨリ之ヲ観レバ神籬形式ノ我国ノ祭祀方法ヲ誤ラズニ伝ヘ来リシモノト言ヒ得ベク實際ソノ形態及内容共ニ我国神社信仰ニ抵触スルモノニ非ザルノミカ幾ラカノ改変ヲ加フレバ帝国ノ神祇ニ依ル正当ナル神社トシテ認メ得ベキ性質ノモノト思惟サレルモノナリ且亦斯ノ如ク御嶽ヲ神社ニ引直スコトニ依リ





本県民ノ神社信仰ガ後世ニ於ケル神社ノ本県ヘノ勧請ヲ俟チテ初メテ興リタルニアラズ日本民族固有ノ神社ヲ本県民モ古来ヨリ信仰シ居リシモノトノ強キ民族的自覚ヲ持チ得ルコトナリ精神的ニ本県民ノ救ハレル処実ニ大ナリト云ベシ。

というもので、具体的な県社郷社創立計画は次の8社である（既設の神社も含まれる）。

県社並郷社創立計画案

社格	社名	祭神	鎮座地
県社	普天間宮	伊弉册尊 事解男尊	速玉男尊 中頭郡宜野湾村
〃	斎場神社	天照大神	斎場御嶽神 島尻郡知念村
〃	北山神社	天照大神	北山御嶽神 国頭郡今帰仁村
〃	宮古神社	伊弉册尊 事解男尊 仲宗根玄雅	速玉男尊 与那覇惠源 宮古郡平良町
〃	八重山神社	伊弉册尊 事解男尊	速玉男尊 八重山郡石垣町
郷社	浮島神社	天照大神	那覇市松下町
〃	名護神社	天照大神	名護御嶽神 国頭郡名護町
〃	末吉宮	伊弉册尊 事解男尊	速玉男尊 首里市末吉町

八重山神社の県社創立の理由は、

#### 一、(県社) 八重山神社

八重山三所大権現ト称シ熊野信仰ニナル慶長十九年創立ニナルモノナルモ明治初年神社明細帳作製ノ際離島ナルタメ調査不十分ニシテ脱漏セルモノナリ曩ニ二千六百年紀年事業トシテ支庁長ヲ奉賛会長トシ御改策ノ計画ナルモ計画中途ニテ現在ニ至ル。

というもので、この県社「八重山神社」は中断した第一次計画を継承する形で、沖縄県の出先機関「八重山支庁」支長を奉賛会長に祭り上げての第二次計画となった。だが、既設の宮古神社、新設の北山神社（工事開始）と斎場神社（奉賛会設立）などは神社建設への何らかの動きが新聞報道や町村誌などで確認できるが、県社「八重山神社」については、現時点では具体的な動きは見えてこない。結局、八重山神社は創立を見ないまま敗戦を迎え、その後「八重山神社」が建設されることは今日までない。

一方、八重山の独立混成第45旅団は、昭和20年6月10日、司令部を八重山農学校から於茂登岳中腹へ移したが、そのころには第45旅団の管内神社<sup>註9</sup>「八重山神社」（小祠）が於茂登岳中腹に完成していた。祭神は、讃岐



写真3 昭和20年6月に於茂登岳中腹に創建された管内神社「八重山神社」の遺構



写真4 「紀元二千六百年記念八重山神社建設趣意書」の後半部分「沖縄県公文書館」所蔵

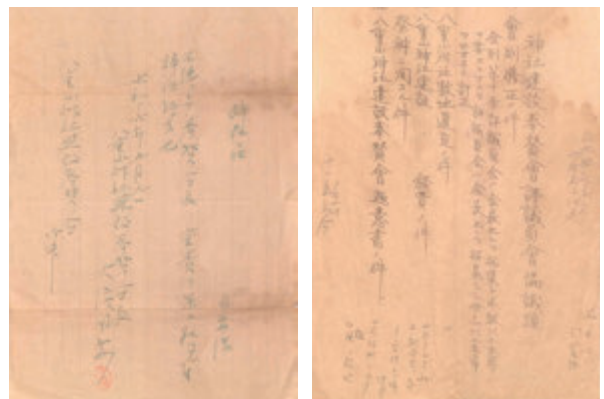


写真5 「八重山神社建設奉賛会長大濱用要氏より八重山神社建設奉賛会宛の辞任届」  
写真6 「神社建設奉賛会評議員会協議題」昭和15年8月30日  
「沖縄県公文書館」所蔵

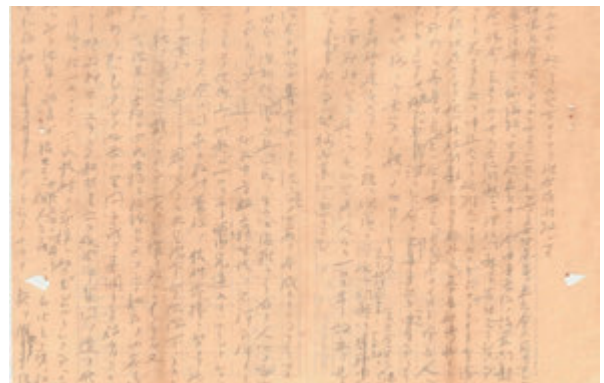


写真7 「昭和16年5月6日評議員会での会長挨拶草稿」の前半部分「沖縄県公文書館」所蔵

の金比羅さんであったともいわれる。<sup>註10</sup>

管内神社「八重山神社」と県社「八重山神社」は社名が同一ということもあって、両社の関係を試論する向きもあるが、現時点では関係を示す資料を伺うことはできてない。両社について考察してみた。

①管内神社「八重山神社」は第45旅団のための神社（於茂登岳中腹の旅団敷地内でしかも不便な場所）で、県社「八重山神社」は公衆礼拝の神社（町の中心部で利便な場所）で、趣旨が違う。

②祭神について管内神社「八重山神社」は金比羅さん（もしくは天照大神など）、県社「八重山神社」は「伊弉冊尊、速玉男尊、事解男尊」で余りに違い過ぎる。

③管内神社「八重山神社」とは別の管内神社が、既に昭和20年3月8日に平喜名飛行場（海軍北飛行場）に建設されていた（昭和19年12月30日地鎮祭、昭和20年2月28日完成、3月8日に遷座祭・佐世保海軍航空隊石垣島派遣隊が建設）。この管内神社は県社「八重山神社」の代替施設にはなりえないのか。代替施設の可能性がある施設が石垣町に二つも必要ないように思える。

④沖縄県主導の県社「八重山神社」が昭和18年10月以降、なかなか具体化せず戦局の激化や予算編成などの諸問題で建設が遅延したからといって県社相当の大規模施設神社を管内神社の小祠に代替させることができるのか。

⑤内務省神祇院管轄の県社「八重山神社」と陸海軍省管轄の「管内神社」が同一線上で議論できるのか。——などの疑問が残る。

因って両社は性格、規模、祭神、管轄も違い、簡便に短時間で建設でき公衆礼拝が制限される可能性の管内神社「八重山神社」が、県社「八重山神社」の代替施設であったとは考えにくい（引き続き詳細な資料収集と検討は必要だ）。

## Ⅵ おわりに——「近代沖縄における祭祀再編と神社」視点序章——

二度にわたる八重山神社建設・創建の動きは、最終的には戦局の厳しさもあって、ついには成就することはなかった。戦後、戦禍にあった既存の「神社」が復興されることはあっても、戦前に新たに目指した「神社」の建設・創立や御嶽の「神社」化は今日まで実現されてい

ない。八重山神社も同様である。一方、近年、一部の御嶽、拝所やビジュアルが日本の社寺と全く同様の神札やお守りを頒布し、朱印を出し、積極的に鳥居を建立する動きと、沖縄に「神社」が増えていないこの事実は、戦前と戦後の祭祀再編が異質であることを物語っているように思える。

大戦前の沖縄における神社建設・創立及び御嶽の神社化、そしてそれに関わる「近代沖縄における祭祀再編」はあらためて詳細に述べてみたい。

なお、戦前における御嶽の改編や祭祀の変更について、新聞見出しの一部を示して、今後の課題としておきたい。

・「邪教ユタを嚴重取締る 横田沖縄県特高課長帰る」（昭和11年9月26日）・「ユタを検挙 沖縄県で根絶期す」（昭和14年3月18日）・「八重山神社建設に関し来郡の糸永宮司と語る 国体明徴強調と国体宣揚に努む」（昭和14年7月18日）・「宇宮良の宗教改革 正しい敬神生活へ」（昭和16年4月17日）・「指導者だ「ノロ」にも新体制 町内各拝所の神行事刷新」（昭和19年1月17日）・「香炉撤去 神拝形式刷む登野城部落の英断」（昭和19年2月23日）・「石垣大濱全つかさが戦捷祈願」（昭和19年7月1日）（『宜野湾市史 第六巻資料編五』昭和62年2月28日・『石垣市史 資料編近代7』平成3年8月31日発行・『海南時報』）

註

1～7、沖縄県公文書館所蔵の『大濱用一文書』中の「八重山神社及護国神社関係資料」（大濱用一氏寄贈資料、寄贈資料番号43～55までの資料、閲覧用資料コード0000011673）。特に7は鉛筆書メモの「昭和16年5月6日の評議員会会長挨拶草稿」

8、「神社創立案ニ関スル件」（『波名城 波上宮誌 通史』編集波上宮神社史編纂委員、平成27年10月21日の「資料編」、原本は神社本庁所蔵）

9、「二十年六月始め頃、かねてから於茂登岳頂上に於て造営中の神社が落成、頂上からおおよそ四キロ位降りたところに四軒ほどの司令部用建物が完成、司令部が移転、戦闘司令部となった」元旅団副官緒方雪男「本土最南端の護り・石垣島兵団」（瀬名波栄『太平洋戦争記録「石垣島方面陸海軍作戦」』132～134頁、沖縄戦史刊行会、1996年）（平成30年12月15日「近代沖縄における祭祀再編と神社」研究班開催の「研究会」での発表者坂井久能氏のレジュメ「管内神社とは何か―独立混成第45旅団の八重山神社を事例として―」より）

10、元独立歩兵第298大隊中隊長山下律彦「石垣島の思い出―独立歩兵第二九八大隊に所属して」（石垣市史編纂室『市民の戦時・戦後体験記録』第一集、179～197頁、石垣市役所、1983年）（註9と同じく坂井久能氏のレジュメより）

11、志田毅「日誌・空の生活（抄）」（石垣市史編纂室『市民の戦時・戦後体験記録』第四集、1988年）（註9と同じく坂井久能氏のレジュメより）